

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	菅原 一真
論文担当者	主査 阪上 雅史
	副査 越久 仁敬
	副査 池内 浩基
学位論文名	Change in tongue pressure in patients with head and neck cancer after surgical resection (頭頸部がん切除患者における舌圧の変化)
論文審査の結果の要旨	
<p>頭頸部がん切除後の摂食嚥下障害に対する縦断調査，定量評価は不十分であり障害を予測する方法は確立されていない．舌圧は舌を口蓋に圧接する力を評価するもので，測定器は簡便かつ安全に，これを数値化できる．本研究では，舌圧測定と摂食嚥下スクリーニングテストを用いて，頭頸部がん切除後の患者の摂食嚥下機能を縦断調査した．</p> <p>対象は，兵庫医科大学病院で頭頸部がん切除術を行い，術前/術後1～2週/術後1か月/2か月/3か月に舌圧測定および摂食嚥下スクリーニングテスト（反復唾液嚥下テスト/改訂水飲みテスト/水飲みテスト /フードテスト）を記録した患者57名（男性36名，女性21名，26-95歳）とした．1)舌圧とがん原発部位（歯肉/舌/中咽頭/下咽頭など）・進行度（Stage分類）・併用治療（気管切開術/再建術/頸部郭清術/放射線治療/化学療法）の関連，2)舌圧とスクリーニングテストの相関、3)スクリーニングテストの異常を予測する舌圧カットオフ値の分析を行った．</p> <p>舌圧は，術後1-2週で有意に低下し，その後徐々に回復した．原発部位ごとの有意差はなかったが，口底・中咽頭は舌圧が低く，舌骨上筋群の切除による影響が考えられた．StageⅢ・Ⅳの患者/再建術/放射線治療を行った患者は，有意な舌圧の低下を示した．舌圧は摂食嚥下スクリーニングテストの結果と相関を認め，スクリーニングテストの異常を予測する舌圧カットオフ値をROC曲線で算出したところ，14.8kPaであった．</p> <p>本研究は，歯科口腔外科領域において重要な，頭頸部がん切除後の摂食嚥下機能に関する研究で，臨床的に有用な知見であり，学位授与に値すると判定した．</p>	